

山梨県農政部試験研究機関（水産技術センター） 課題評価会議

1 評価委員

岩田智也	学識経験者・研究	山梨大学生命環境学部環境科学科 教授
三浦 久	流通・生産	山梨県漁業協同組合連合会 副会長
古菅一芳	流通・生産	山梨県養殖漁業協同組合 組合長

2 課題評価委員会

(1) 第1回 令和3年8月24日（火）～9月3日（金）

※新型コロナウイルス感染症対策のため書面方式により開催した。

事前評価課題「富士の介等の機能性面からの魅力向上」 主任研究員 三浦正之

研究の必要性	4.3
研究内容の新規性	4.3
研究目標、研究計画の妥当性	3.7
研究予算、研究体制の妥当性	3.0
総合評点	3.8

評価所見

県産養殖魚である「富士の介」やニジマスの栄養的機能の向上を通じてさらに付加価値を高めるとともに、県民の健康促進ならびに関連産業の活性化が期待される。魚類におけるビタミンDの合成や濃縮に関する知見は少なく、本研究課題により飼料からの摂取や皮膚での生合成の寄与が明らかになるとともに、ビタミンD含有量を上昇させるための効率的な飼育方法と未利用部位の有効活用に関する新規性の高い知見が得られると期待される。研究を進める過程で、得られた知見をもとにどの程度のビタミンD含量の上昇を目指すのか、そのための養殖条件をどのように検討するのかなど、定量的な目標設定に基づく試験内容の検討を行うことが望ましい。高い評価を得つつあるブランド魚「富士の介」のさらなる付加価値向上により、県内養殖関連業界にとって重要な成果が期待されるだけでなく、食品（菓子）や観光産業（土産）の活性化、未利用部位の活用による廃棄物の有効利用など多方面への波及効果が期待される。

事前評価課題「アユの小型早期放流の実証試験」 研究員 芦澤晃彦

研究の必要性	4.0
研究内容の新規性	3.7
研究目標、研究計画の妥当性	4.0
研究予算、研究体制の妥当性	3.3
総合評点	3.8

評価所見

山梨県の内水面漁業を支えるアユの遊漁収入を増やすための効果的な放流方法を検討するための試験研究であり、漁協のみならず遊漁者の増加を通じた関連産業の活性化にもつながる有用性の高い研究である。アユ種苗生産において大きな課題であった冷水病対策を克服した上で、あえて小型魚を放流することで放流事業の費用対効果の上昇を狙う斬新な視点に基づく研究である。先行研究の実績により小

型早期放流で一定の成果が得られることが予測されており、本研究計画においても目標を達成することができるかと期待できる。アユ漁業の衰退には食害や種苗性、放流技術の向上だけでなく、河川環境や遊漁者の世代交代、嗜好の変化など、様々な要因が関わっていると思われる。漁協や釣り産業、遊漁者、観光関連業界、河川管理者等との意見交換や連携をはかりながら、より大きな視点と枠組みで河川の内水面漁業を活発化させる方策についても検討をしていただきたい。

事前評価課題「クニマスの保全と養殖に関する研究」 主任研究員 加地弘一

研究の必要性	4.7
研究内容の新規性	4.0
研究目標、研究計画の妥当性	4.0
研究予算、研究体制の妥当性	3.7
総合評点	4.1

評価所見

本県にのみ現存するクニマスの保全と養殖に関する研究は、山梨県の希少生物保全や地域振興および水産資源としての有効活用だけでなく、我が国の野生生物保全において重要な意義がある。得られる知見は、県内外に多方面に波及するものであり研究の必要性はきわめて高い。これまで蓄積してきたモニタリングや養殖条件に関する知見に加え、ICT（リアルタイムモニタリング）とAI（魚種の自動判別）を活用した食害評価、環境依存的な発育や生残の機構解明など、きわめて新規性の高い手法を用いた研究が計画されている。過去の研究活動実績に立脚した計画が定められており、期間内で十分な成果が得られる可能性が高い。一方、保全と養殖の個々の研究内容についてはより具体的な目標を設定することが望ましい。クニマス保全にあたっては、効果的な外来ウナギ駆除技術の開発が必要であり、より具体的な研究計画の検討を期待したい。これまでの研究実績により優れた成果が得られており、現体制で今後も十分な成果が得られるものと期待される。一方で、クニマスの保全と管理にはより多様な主体が関わるべきであり、県内外の関連機関との連携体制の構築も進めていただきたい。本課題で得られる成果は、山梨県の内水面漁業や地域振興だけでなく、日本の生物多様性保全と希少生物の保護・活用に資する貴重な知見となる。国や秋田県も含めた研究協力体制の構築が望まれる。

(2) 第2回 令和4年2月9日（水）～14日（月）

※新型コロナウイルス感染症対策のため書面方式により開催した。

事後評価課題「県産アユ種苗の有効活用に関する研究」 研究員 芦澤晃彦

研究目標の達成度 3.7

評価所見

アユの種苗生産に関わる3つの要素（ミズワタクチビルケイソウ、水カビ対策、低水温飼育）について、綿密な計画をもとに実験・研究を行っており、種苗性の向上に資する具体的な知見を得ることができている。特に、ミズワタクチビルケイソウについては他県に先駆けて生態影響のデータを蓄積している点で県内外への波及効果が期待され、さらに水カビ対策や低水温飼育では飼育環境の最適条件が明らかにされている。いずれも生産現場での実用性が高い成果であり、目標通りの達成度を上げていると判断できる。さらに本課題研究を継続することで、アユの生産向上に繋がる新たな知見やノウハウの蓄積に努めていただきたい。